ランドセルの歴史と日本人のジェンダー観の関連に関する研究
――ランドセルの色の変遷に着目して――

The History of the Randoseru (Elementary Schoolbag) and Gender in Japan: Focusing on the Transition of its Colors

林　　雅代・山田　彩佳

Masayo HAYASHI and Ayaka YAMADA

Abstract

This study aims to examine the relationship between the transition of the color of the Randoseru, a kind of school bag commonly used by Japanese elementary students, and Japanese gender values. This study addresses two questions: 1) when and how the gender-stereotyped usage of colored Randoseru became common, and 2) how such usage became less dominated and how the Randoseru came to be purchased in the children's own color preferences.

The Randoseru originated from knapsacks used in the military and were originally used as school bags among children from wealthy families in Meiji era. The color of the Randoseru in early days was black, and it became varied as more children, both boys and girls, began to use it by the 1950s. The analysis of pictures appearing in the longtime major children's magazine "*Shogaku Ichinensei* (*The First Grader*)" shows that the use of Randoserus in the color black for boys and red for girls became common in the mid–1960s, when people became more conscious about gender differences, in line with sexual division of labor under the high economic growth. In the late 1970s, however, Randoserus with colors other than black and red went on sale, and such sale accelerated after the 2000s, as gender norms became questioned more and more. The development of artificial leather enabled producers to widen the variety of Randoseru colors. In conclusion, the gendered choice of colored Randoserus still remains in the present Japanese society, showing that gender equality has not been fully achieved.

はじめに

現在の日本においてランドセルは，子どもたちが小学校に通う際の必需品である。その誕生は明治期であり，現在まで約 100 年以上受け継がれてきた。その安全性や耐久性等は年々進化し，近年

では色のバリエーションも増加している。最近では「ラン活」と呼ばれる，子どもが小学校に入学する1年ほど前からランドセルを選ぶ動きも活発になっている（佐藤朋彦 2020，pp. 76–78）。

このように，日本で長く愛用されているランドセルには，技術革新だけでなく，日本人の考え方や社会の変化などが反映されているのではないだろうか。本稿では特に，ランドセルの色の変化に着目して，日本人のジェンダー観との関連を考えていきたい。

日常生活を顧みると，男性には黒や青といった寒色系，女性には赤やピンクといった暖色系の配色がなされることが多いと思われる。例えばトイレの入り口にあるマークである。男性には黒や青，女性には赤やピンクが用いられていることが多い。北神ら（2009）によると，これは日本に特有のことで，実際に日本人はトイレのピクトグラムを認識する際，色情報が重要となっている。

同様のことは，ランドセルの色についてもいえるのではないだろうか。ランドセルメーカーの羽倉（2020）によると，ランドセルの色は，1950年代半ば（昭和30年代）から2000年代以前までは，男児が黒色，女児が赤色のランドセルを用いるのが主流であり，平成に入って，青，ピンク，紫など，カラフルな色合いのものが使用されるようになった。

ランドセルの色は，ランドセルを構成する要素の中でも，近年特に重要なものとなっている。クロス・マーケティングは，小学校に進学する児童を持つ20～69歳の男女を対象に，ランドセル購入に関する調査を行っている。調査結果が公表されている2018年から2021年において，「商品選定における重視点と決め手」の1位は，4年とも，「子どもの好きな色だった」ことであった（ランドセル工業会 2021）。また，クラレの調査によれば，ランドセルの購入動機において「カラー」を選ぶ人の割合は，2007年では17％で3位，2011年では26％で2位，2015年では27％で1位となっている（ランドセル130年史編纂委員会 2016，p. 75）。

ランドセルの歴史に関する先行研究としては，ランドセルの誕生から学用品としての普及について論じた佐藤秀夫（1987）や，1960年代後半から1970年代頃にかけて展開したランドセル廃止運動について検討した丸山（2016）以外は，管見の限りでは見当たらない。先述したように，多くの日本人が意識するランドセルの色の変遷は，人々の考え方や社会の変化という観点から検討する余地のある課題であると思われるが，この点に関して先行研究ではほとんど検討されていないのが現状である。

佐藤秀夫（1987）が指摘するように戦後に一般化したと考えられる，男児は黒色，女児は赤色という子どもの性別によるランドセルの選択から，子ども個人の好みによる多様な色のものの選択へ，という変化には，日本におけるジェンダー規範の変化が反映されていると考えられる。本稿では，いわゆる日本的雇用のもとで性別役割分業が広がった1950年代半ばから1960年代にかけての高度経済成長期において，性別によるランドセルの色の選択が一般化した（仮説a），近年においては，ジェンダーステレオタイプの解消が目指される中で，ランドセルの色も多様化してきた（仮説b），という2つの仮説を設定し，検討を進めていくこととしたい。

以上をふまえ，本稿では，ランドセルの歴史と日本におけるジェンダー観との関連について，ランドセルの歴史を整理しながら明らかにしていく。第1節では，ランドセルの誕生と普及の過程について検討する。第2節では，赤色ランドセルの誕生や，黒色および赤色のランドセルの主流化について，児童雑誌『小学一年生』（小学館発行，1925年創刊）掲載記事の挿絵の分析を通じて，当時のジェンダー規範との関連を検討する。第3節では，1990年代以降のランドセルの多色化とジェンダー規範の揺らぎとの関連について検討する。

1．ランドセルの誕生と普及

1.1　ランドセルの誕生

日本においてランドセルの原型が誕生したのは，江戸時代末期のことである。ランドセル 130 年史編纂委員会（2016，p. 18）によれば，「江戸時代末期に洋式陸軍が採用したオランダの背嚢（はいのう）（ランセル）」が，ランドセルの原型となった。背嚢とは，背負って用いる，布製の物入れ袋のことである。元来軍装品であった背嚢は，1880 年代後半に兵式体操を本格採用した高等師範学校・高等中学校・学習院などで，学校用具として使用されるようになった（佐藤秀夫 1987，p. 156）。その過程では，華族の子弟の学校である学習院が特に大きな役割を果たしていた。ランドセル 130 年史編纂委員会（2016, p. 19）によれば，学習院には「学校では皆平等，家庭環境を教育の場に持ち込むのはいけない」という理念があった。その理念に基づき，1885 年，馬車や人力車で直接学校に乗り付けたり学用品を従者に持たせたりせず，必ず生徒自らが学用品を携行するよう定められた（佐藤秀夫 1987，p. 156）。この目的で，両手を空けて学用品を持ち運ぶことのできる背嚢が使用されるようになった。

ランドセル使用の始まりは，1887（明治 20）年とされている。この年，当時の総理大臣であった伊藤博文が，嘉仁親王（後の大正天皇）の学習院初等科への入学祝いとして，特注の箱形通学鞄を献上した（ランドセル 130 年史編纂委員会, 2016, p. 19）。その後，1890 年には学習院規則で「背嚢・黒革」を用いるよう定められ（佐藤秀夫 1987，p. 157），1897 年には背嚢の細かな形状や寸法が統一された（ランドセル 130 年史編纂委員会 2016，p. 19）。これが学習院型ランドセルとされ，ランドセルの基本的なスタイルは現在まで変わっていない。学習院初等科のウェブページを見ると（学習院初等科 2022），校章の型押しのある黒色のランドセルを男女共に今日使用していることが確認できる。

1.2　都市部を中心としたランドセルの普及

ランドセルはその後，都市部を中心に普及が進んだ。佐藤秀夫（1987，p. 157）によれば，学習院だけでは需要が少なすぎると判断したランドセル製造業者が，学習院の許可を得て市販を始めたことが契機とされる。当初は，東京山手の中産階級以上の者に革製ランドセルが広まり始めたという。1929 年に学習院型ランドセルの特許権問題が解決すると，他社も一斉にランドセル生産を開始した（佐藤秀夫 1987，p. 157）。こうして，大都市中間層の児童の間では，ハイカラな通学用具としてランドセルが使用されるようになった（細谷ほか編 1990，p. 474）。なお，女児におけるランドセル使用は，大正末期～昭和初期にかけて全国の高等女学校で洋服の制服が採用されるなど（刑部 2021，pp. 79–81），通学服の洋装化とともに広がったのではないかと推測されるが，詳細は不明である[1)]。

1）　なお，女子学習院では，1937（昭和 12）年の「女子学習院服装規程」において，現在のセーラー服が制服となるが，同規程ではランドセル使用については記載がない。第 2 節で分析する児童雑誌『小学一年生』について，確認が可能であった 1936 年 9 月号（第 12 巻 8 号）では，赤系統の色のランドセルを使用する女児が描かれており，以後 1939 年までに刊行された号にみられるランドセルを使用する児童が描かれた挿絵では，男女がほぼ同じ頻度で登場している。このことから，1930 年代には都市部の中間層の間で，女児にもランドセルの使用が広がっていたのではないかと考えられる。

しかし，革製のランドセルは，全国的にはまだ普及していなかったと考えられる。地方では，風呂敷を用いることが一般的であったという[2)]。また，1930 年頃からは通学時に携帯する教科書・学用品の量が増えたため，布製の肩掛鞄が使用されていた（細谷ほか編 1990，p. 474）。1938（昭和 13）年 4 月に国家総動員法が成立し，軍需物資である皮革について，同年 7 月に「皮革配給統制規則」および「皮革使用制限規則」が決定されると，ランドセルは布帛製のものなど代用品を中心に製造されるようになった[3)]。

皮革統制によって生産された代用品が，ランドセルの普及を促進した可能性も考えられる。安孫子（1966）によると，アジア太平洋戦争中，革靴の安価な代用品が地方に広まり，終戦後に生活が安定するにつれ，代用品ではなく革靴を購入する者が増加したという。戦時中の代用品の使用が，地方での西洋風の生活様式への移行をもたらしたというのである。

皮革統制が解除された 1950 年以降，牛革のランドセルが出回るようになったと考えられる[4)]。佐藤秀夫（1987，p. 157）が，ランドセルが全国的に小学校新入生の必需品となるのは，第二次世界大戦後のことであると述べているように，1950 年代に入ると革製ランドセルの使用が全国的に広がっていったと考えられよう[5)]。

1.3　初期のランドセルの色

初期のランドセルは黒色で，ヌメ革という牛革製であった。ヌメ革とは牛皮を柿や栗・アカシア等のタンニンで鞣（なめ）した革のことで，ベルト・鞄・小物などに用いられるという。「鞣し」とは，「生物（なまもの）である動物の皮を樹液や数々の薬品で処理すること」である（日本タンナーズ協会 2020；ランドセル 130 年史編纂委員会 2016，p. 44）。タンニンで鞣すことが当時の製革技術では主流であった（ランドセル 130 年史編纂委員会 2016，p. 44）ため，ランドセル用にもヌメ革が用いられたと思われる。

ランドセルに黒色の染料が用いられた理由としては，次の 2 点が考えられる。1 点目は，ヌメ革の素材を考慮したためであると思われる。土屋鞄製造所（2013）によれば，ヌメ革は頑丈だが，傷が付きやすく，元々の牛の持っていた傷やシワ等がそのまま反映されるほか，水の影響を受けやすい。このようなデメリットを目立たなくするうえで，黒色が適していたと思われる。2 点目は，ランドセルの基本型をもたらした学習院の当時の制服との関係である。学生服メーカーのトンボ（2020）によれば，1879 年に採用された学習院の制服は，季節によって，紺色･白色･黒色であった。そのため，制服との色合いが考慮され，ランドセルにも黒色が採用された可能性があるだろう。

先述したように，1930 年代後半から 1950 年までの皮革統制の時期には，さまざまな素材を用い

2）　セイバンミュージアム（兵庫県たつの市）の展示による（2021 年 7 月 23 日訪問）。

3）　これに関して，愛知鞄九十年史編纂委員会編（1968，p. 41）によると，皮革製品の製造について，「戦時経済の真只中にあって厳しい統制があったけれど，皮革がだめなら布帛へ，布帛が使用できなくなると擬皮へと，次から次へと資材の転換を手堅く行なってきたために，生産者も減らなければ生産量も減少どころか，むしろ増産できた」という。

4）　ランドセル 130 年史編纂委員会編（2016，p. 131）によれば，1953（昭和 28）年に牛革ランドセルが出回ったとされている。

5）　総理府統計局編（1964）によると，「家計調査」において収支項目に「ランドセル」が加わるのは 1958（昭和 33）年のことである。このことから，高度経済成長期に入った 1950 年代後半以降，購入層が広がっていったものと考えられる。

てランドセルが製造された。ランドセル 130 年史編纂委員会（2016，p. 131）によれば，1947（昭和 22）年にブリキランドセルが登場したほか，1949（昭和 24）年に豚革ランドセルの販売が好調になった。同書には，白色のブリキランドセルの写真が掲載されている（p. 5）。また，豚革ランドセルについては，遠藤（1993）において，ランドセル製造のアジア鞄嚢（ほうのう）社 2 代目の髙山昇（当時 46 歳）が，「子どもの頃には，家では豚革のランドセルを作っていました。赤，黒の区別はなく，全部，セピア色で，かぶせ（ふた）の部分に野球のバッターかバラの花の型押しがしてあった」と述べている。実際，ランドセル 130 年史編纂委員会（2016，pp. 5–7）には，昭和 20 年代から昭和 30 年代のものとして，茶色や赤茶色，赤色などで，野球や花の刺繍の入ったランドセルが紹介されている。皮革統制の中で製造された代用品の魅力を高めるため，多様な色や模様を施すなどの工夫がなされた可能性もあるだろう。

このほか，1960 年代には，交通安全面を重視した黄色のランドセルも販売されたようである（朝日新聞 1962）。これは，自動車の保有車両数増加などのモータリゼーションの進展により，1960 年代に年間交通事故死亡者数が急激に増加したことに，影響を受けたものと思われる（小島・後藤・加藤 2012）。

このように，明治中期以降，都市部の富裕層の子弟からランドセル使用が広がり，戦中・戦後の原材料不足の中でもさまざまな工夫が凝らされながら，次第により広範な社会階層や地域へと広がっていったと考えられる。

2. ランドセルの大衆化とジェンダー規範

ここまでを振り返ると，1950 年代までには，さまざまな色や柄付きのランドセルが登場したと考えられる。しかし，後に長らく主流となるのは，黒色と赤色のランドセルである。そこで本節では，赤色のランドセルの誕生や，黒色と赤色のランドセルの主流化について，その時期や経緯を検討していきたい。

2.1　児童雑誌『小学一年生』の挿絵に描かれたランドセル

この点を考えるにあたり，本稿では，株式会社小学館が発行する児童雑誌『小学一年生』（1925 年創刊）にみられるランドセルの挿絵に着目する。

『小学一年生』を取り上げるのは，ランドセルを使用する児童を表象すると思われる小学 1 年生に向けた雑誌の代表例と考えられるためである。その理由として，以下の 3 点が挙げられる。1 点目に，発行部数が多いことである。朝日新聞社（1951）によると，『小学一年生』など小学館が発行する雑誌が，業界内でトップの発行部数となっている。また，2021 年 4 月から 6 月における『小学一年生』の 1 号あたりの平均印刷部数は 75,000 部で，子供誌カテゴリ内で 4 番目に多い（一般社団法人日本雑誌協会 2021）など，現在に至るまで児童雑誌の中では最も代表的なものであるといえる。2 点目に，当該雑誌の読者層が，特に小学 1 年生の児童やその保護者を中心としていると考えられるためである。小学館が発行している児童雑誌の中で，現在，小学校入学の象徴となっているランドセルが最も登場しやすいのは，『小学一年生』であると考えられる。3 点目に，『小学一年生』は 1925 年の創刊以降，現在まで基本的に毎月継続発行されているためである。ただし，タイトルの変更や他雑誌との統合などがあった。創刊から 1940 年 3 月号までは『セウガク一年生』

というタイトルであったが，1941 年に施行された国民学校令で，「小学校」が「国民学校」と改称されたことに伴い，1941 年 8 月号・9 月号では『コクミン一年生』というタイトルに変更された。その後 1942 年 2 月号から 1944 年 10 月号までは，『良い子の友』というタイトルで『コクミン二年生』と統合出版された。その後，1946 年 2 月号で『コクミン一年生』として復刊し，1947 年 3 月号まで同名で発行された。1947 年 4 月号から『小学一年生』という現在のタイトルとなった（小学館 2015）。

以上のように，長期にわたって小学 1 年生向けに毎月発信を続けてきた『小学一年生』には，当時の児童の様子が，時代の変化と共に反映されていると考えられる。『小学一年生』におけるランドセルの描かれ方を分析することで，赤色のランドセルが生まれた詳細な時期や，黒色と赤色のランドセルが定着した時期を探ることができると思われる。なお, 分析対象とする『小学一年生』は，国立国会図書館等で閲覧可能なものに限り，赤色のランドセルの誕生や，黒色と赤色のランドセルの主流化を確認できる時期までのものとする。

2.2　赤色ランドセルの誕生

赤色のランドセルは, 1950 年頃までには誕生していたと思われる[6)]。『小学一年生』を参照すると，1949 年 4 月号（第 5 巻 1 号）の表紙裏および p. 1 で，赤色のランドセルを背負った女児が描かれている（図 1)。この挿絵からはさらに，ランドセルが小学生（とりわけ小学 1 年生）あるいは小学校入学の象徴であるとする規範の存在も確認することができる。

図 1　『小学一年生』1949 年 4 月号（第 5 巻 1 号）の表紙裏および p. 1 の挿絵

6)　注 1 でも言及したように，『小学一年生』1936 年 9 月号（第 12 巻 8 号）において，赤系色のランドセル姿の女児がみられるが，赤色なのか茶色なのかは判別が困難である。明確に赤色と判別可能なものが登場するのは，1950 年前後刊行の号である。

その後，1950 年 3 月号（第 5 巻 12 号），p. 62 でも，赤色のランドセルを背負った女児が描かれている。さらに 1951 年 10 月号（第 7 巻 7 号），p. 61 では，赤色のランドセルを背負った男児および女児の挿絵が掲載されており，1951 年 11 月号（第 7 巻 8 号），p. 40 では，赤色のランドセルを背負った女児の挿絵が掲載されている。このように，『小学一年生』において赤色のランドセルが度々描かれるようになっていることから，1950 年頃までには赤色のランドセルが誕生していたと考えられる。

しかし，赤色のランドセルが誕生した頃は，男児は黒色，女児は赤色といった形の性別とランドセルの色の対応は，必ずしも明確ではなかった。図 1 では，男児は黒色のランドセルのみではあるものの，女児が黒色のランドセルを背負っている様子も描写されている。また，1951 年 11 月号（第 7 巻 8 号），p. 40 では，茶色や白色のランドセルを使用する男児や，赤色の肩掛鞄を持った児童（性別判別不能）が描かれている（図 2）。同じ頃の他号の挿絵をふまえても，当時のランドセルの色は，黒色や赤色のほかに，茶色や白色のものもみられたと考えられ，またランドセルではなく肩掛鞄などを用いる児童も存在したと思われる。

ただし，男児が赤色のランドセルを使用している挿絵は，比較的少ない。1950 年 4 月号（第 6 巻 1 号）の「よわむしぼうず」という連載では，p. 51 および pp. 53–55 において，赤系色のランドセルを使用する男児が描かれている（図 3）。しかし同年 6 月号（第 6 巻 3 号），p. 58 や同年 7 月号（第 6 巻 4 号），pp. 30–31，pp. 34–35 では，同連載にもかかわらず，ランドセルは茶色で示されている（図 4）。このことから，この連載にて描かれているランドセルは，茶色のランドセルと捉えることが妥当であると思われる。

この点をふまえると，1949 年および 1950 年の『小学一年生』に登場する男児のランドセルの色は，黒色，白色，茶色のみである。一方，女児においては，先に述べたように，赤色のほかに，黒色のランドセルなどを使用している描写もあった。表 1 は，1949 年および 1950 年の『小学一年生』における各色のランドセルの登場回数を，男女別に整理したものである。

図 2　『小学一年生』1951 年 11 月号（第 7 巻 8 号）pp. 40–41 の挿絵

図３　『小学一年生』1950 年４月号（第６巻１号）pp. 54–55 の挿絵

図４　『小学一年生』1950 年６月（第６巻３号）pp. 58–59 の挿絵

表１　1949 年–1950 年の『小学一年生』におけるランドセルの色と男女別登場回数

	黒	白	茶	赤	赤茶
男児	7	2	5	0	0
女児	2	2	5	3	2

（1949 年４月号・７月～10 月号および 1950 年３月～７月号より筆者作成）

ここからわかるように，男児の挿絵では赤色のランドセルは見られず，黒色の登場回数が最多である。一方，女児においては，黒色のランドセルも見られるものの，赤色や赤茶色の割合が高くなっている。このことから，黒色ランドセルの使用は男児に限られないが，赤系色のランドセルの使用は女児が中心という傾向であった可能性があるだろう。日高（2021，p. 146）によると，赤やピンクなど暖色系を女性色，青や紺などの寒色系や白・黒の無彩色系を男性色とする規範は，他国でも伝統的にみられる。1950 年頃のランドセル使用においても，そうした傾向が一定程度みられるようにも思われるが，のちの時期ほどには固定的ではなかったようである。

2.3 「男児は黒色，女児は赤色」のランドセルの主流化

それでは，男児は黒色，女児は赤色のランドセルが主流となったのは，いつ頃のことであろうか。ここまでの検討からは，少なくともそれが 1950 年代以降のことであると考えられる。

そこで，1950 年代から 1960 年代にかけての『小学一年生』の表紙絵の変遷を検討したい。『小学一年生』各号の表紙には，その時期らしい装いの男児と女児の絵が描かれている。ランドセルが小学生や小学校入学の象徴となっているのであれば，入学時期に刊行される 4 月号にランドセルが描かれる可能性が高いであろう。

表 2 は，1950 年代および 1960 年代の『小学一年生』における，毎年 4 月号の表紙に描かれた男女のランドセルの色をまとめたものである。この時期のほとんどの 4 月号表紙にランドセルが描かれていることから，1950 年代初めにはすでに，ランドセルを小学生の象徴とみるような規範がおおよそ定着していたものと思われる。ランドセルの色については，1950 年代から 1960 年代前半までは，男児は主に茶色，女児は茶色や赤系色のランドセルを背負った姿で描かれているが，1960 年代後半になると，男児は黒色，女児は赤色のランドセルというパターンがほぼ定着してくることがわかる（図 5 および図 6 を参照）。

この結果から，「男児は黒色，女児は赤色」という性別に対応した色のランドセルが主流となっ

表 2　1950 年代および 1960 年代の『小学一年生』4 月号に描かれた男女別ランドセルの色

	1950	1951	1952	1953	1954	1955	1956	1957	1958	1959
男児	茶	判別不能	茶	茶	茶	―	黒	茶	黒	茶
女児	茶	ピンク	ピンク	ピンク	判別不能	―	ピンク	茶	赤	赤
	1960	1961	1962	1963	1964	1965	1966	1967	1968	1969
男児	茶	―	―	茶	茶	黒	黒	黒	黒	判別不能
女児	赤	―	―	判別不能	赤	赤	赤	赤	赤	赤

（小学館刊『小学一年生』各年次 4 月号表紙絵より筆者作成）

注）「判別不能」はランドセルの色の判別が困難であったもの，「―」はランドセルが表紙絵に描かれていなかったもの。なお，「ピンク」は，正確には薄紫色ないしは色褪せた茶色のような赤系色であり，経年劣化等によってピンク色のように変色したものと思われる。

図 5　『小学一年生』1964 年 4 月号（第 20 巻 1 号）の表紙絵

図 6　『小学一年生』1965 年 4 月（第 21 巻 1 号）の表紙絵

たのは，1960 年代半ば頃のことであったと考えられる。もっとも，ランドセル 130 年史編纂委員会（2016, p. 131）には，昭和 30（1955）年に「ヌメ革を黒と赤に染色」したとあり，ランドセルメーカー側では 1950 年代半ば以降，性別に応じたと考えられる色で製造・販売を展開する動きはあったが，消費者側でそれが定着していくのはもう少し後のことであったのではないかと思われる[7)]。

性別に対応した色のランドセルが 1960 年代半ば頃から普及した背景には，どのようなことがあったのだろうか。

その一つに，ランドセル製造上の技術革新として，クラレが開発したクラリーノに代表される人工皮革の使用が挙げられる。クラリーノとは，「ナイロンやポリエステルなどの不織布に，ウレタンによる表面加工を施し」た人工皮革のことで，「軽量で撥水性が高い」という特徴がある。加えて「素材が均一化されているため生産性が高く，カラー展開も多彩」だという（ランドセル 130 年史編纂委員会 2016，p. 44）。クラリーノを用いたランドセルは，1960 年代後半から職域や幼稚園などの特定のルートで販売が始まり，1970 年代には一般ルートでも扱われるようになった。人工皮革のランドセルは天然皮革のものに劣るとみなされて安価で流通する傾向にあったが[8)]，高級人工皮革の開発などを通じて，次第にその傾向は解消されていった（ランドセル 130 年史編纂委員会 2016，pp. 66–67）。

いま一つの背景として，1964 年東京オリンピック開催の際に生み出されたピクトグラムと色を組み合わせて男女のトイレを表示する慣習のように（博学こだわり倶楽部編 2017），色彩によって視覚的に男女を区別するような仕方が，1960 年代半ば頃から広がっていったことが挙げられる。高度経済成長期は，都市部を中心に，男女の社会的な役割の区別が進んだ時代であった。例えば，1950 年の事務職従事者の数は 306 万人で，うち女性は 30％程度であったが，1960 年代末には事務職数が 1950 年の約 2.5 倍，うち女性の割合は 50％近くとなった（金野 2000，p. 138）。労働組合の要求によって，大手企業を中心に従業員 1 人の賃金で家族を養えるような給与体系が導入される中で，女性事務職は結婚退職を前提とした短期勤務の労働者と位置付けられていった。戦後の大企業において事務作業の見直しが進められ，柔軟な対応力や融通性が求められる判断事務と定型的で単純な作業事務とに分類されると，次第に判断事務は基幹労働者である男性に，作業事務は女性に割り振られるようになっていった（金野 2000，pp. 141–144，pp. 153–157）。こうして，戦後から高度経済成長期にかけて性別役割分業が明確化し，男女のライフコースが分化していく過程で，色による男女の区別が受け入れられていったものと考えられる。「男児は黒色，女児は赤色」というラン

7）　第 3 節で言及する 1960 年代後半に各地で展開された「ランドセル廃止運動」のさなか，中小企業振興事業団によって実施されたランドセルに関する調査において，ランドセルの色について尋ねたところ，黒が 47.1％，赤が 45.8％，紺が 1.3％，こげ茶が 2.6％，その他が 3.2％となっており，黒色と赤色のランドセルが主流となっていることがわかる。愛知鞄百年史編纂委員会編（1977），pp. 31–38 参照。なお，注 5 で述べたように，高度経済成長期に入った 1950 年代半ば以降，ランドセル購入層は広がっていったと考えられる。総理府統計局編（1977，p. 424）によると，1963（昭和 38）年から 1975（昭和 50）年にかけてランドセルの平均価格は年々上昇しているが，購入数量はほぼ変動していないことから，ランドセル購入が一般化するのは，1960 年代半ば頃なのではないかと推測される。

8）　同上の中小企業振興事業団によるランドセルに関する調査では，購入したランドセルの材質についても尋ねている。それによると，9 割が皮革であり，合成樹脂は 1 割程度に過ぎない。ただし，地域差があり，人口 10 万人以上の都市部比べて郡部で，また北海道・北陸・九州などで，合成樹脂という回答の割合が高かった。愛知鞄百年史編纂委員会編（1977），pp. 31–38 参照。

ドセルの主流化は，こうした社会変化に照らして理解されるべきであろう。

3. ランドセルの多色化とジェンダー規範の揺らぎ

このように，1950 年頃までにはランドセルは小学生や小学校入学の象徴となり，さらに 1960 年代半ば頃からは性別に対応したランドセルの色が一般化していくなど，ランドセル使用が全国的に標準化していった。その一方で，1960 年代後半以降には，「ランドセル廃止」運動や多色化の展開など，脱標準化の動きもみられるようになっていく。本節では，1960 年代後半から 2000 年代にかけてのランドセルをめぐる脱標準化の動きを検討する。

3.1 ランドセル通学廃止をめぐる動きとランドセルの相対化

「ランドセル廃止」運動とは，1960 年代半ばから 1970 年代前半にかけて，全国各地の学校や自治体で起こった，小学校低学年児童を中心に通学時のランドセル使用を取りやめる動きのことである。ランドセル通学廃止の経過について検討した丸山（2016，pp. 157–158）によると，1963 年度に東京の青山学院初等部が 1 年生と 2 年生のランドセル通学を廃止するとしたことや，翌 1964 年度に同じく東京の東京学芸大学附属小金井小学校で 1 年生のランドセル通学廃止されたことが，新聞で報じられた。

ランドセル 130 年史編纂委員会（2016，p. 25）には，1966 年に全国卸商連盟・全国鞄工業組合連合会が実施した，ランドセルを廃止した自治体・学校に関する調査の結果が紹介されている。その調査結果によれば，東京の私学 4 校，愛知県名古屋市の公立 1 校，愛知県岡崎市の公立 1 校，兵庫県西宮市の全校で，ランドセル通学が廃止されていた。

ランドセル通学廃止の理由としては，丸山（2016，pp. 159–161）によれば，主に次の 4 点が考えられる。1 点目は，児童の交通安全を確保するためである。これは東京都の小金井小学校や，千葉県市川市の事例にみられる。2 点目は，ランドセルによる児童への身体的負荷を軽減するためである。多くの学校で 1 年生など，体の小さい低学年を対象としていることや，青山学院初等部や西宮市の廃止理由から見受けられる。3 点目は，ランドセルが高額であることによる児童の経済的不平等を表面化させないためであり，主に西宮市の事例から捉えられる。4 点目は，学校と家庭との関わり方の見直しのためである。青山学院初等部や小金井小学校，西宮市など，多くの事例でこの理由がみられる。この 4 点目こそが，ランドセル通学廃止の主な理由であったと，丸山（2016）は指摘している。つまり，宿題の廃止を通して，教材を家に持ち帰る，すなわち学校教育を家庭に持ち込むのを防止することが，ランドセル通学廃止の主要な目的であったのである。1960 年代，高校進学率や大学進学率が上昇する中で，ランドセルは，激化する受験競争へと子どもたちが駆り立てられる現状の象徴とみなされていたのである。

こうした動きに対して，ランドセル製造・販売業者が危機感を覚えたのは当然であろう。業界はこれをランドセル存続の危機と捉え，対応を開始した。ランドセルが重く高額であり，児童や家庭の負担になるというマスコミ報道に対して，1971 年には業界申し合わせでランドセルの最高販売価格を 15,000 円と定めた（ランドセル 130 年史編纂委員会 2016，p. 76）。また，ランドセルの形状や寸法が，製造業者によって異なり，消費者側の混乱を招いていたため，1966 年にランドセル寸法を統一した（ランドセル 130 年史編纂委員会 2016，p. 24）。さらに，ランドセルの需要堅持を図

るべく，1960 年代後半の各地区の鞄協会での「ランドセル対策委員会」等設立を経て，1974 年に全国規模の団体である「全国鞄協会ランドセル推進委員会（ランドセル工業会の前身）」を設立し，ランドセルに関する啓蒙活動を展開した（ランドセル 130 年史編纂委員会 2016，p. 76）。

「ランドセル廃止」運動への対策としては，学校関係者や PTA などとの懇談会やランドセルに関する調査，PR 活動などが行われた。例えば，大阪鞄協会は，1968 年 2 月，市民代表や学校関係者を招き，西宮市のランドセル廃止運動についての懇談会を実施した。すると多数の市民から，ランドセル廃止運動に対して強い反対意見が出されたという。ランドセル廃止の問題点としては，帰宅後に児童が勉強しないこと，教科書を自宅用にも取り揃えている家庭があること，できる子とできない子の差が大きくなることが挙げられた（ランドセル 130 年史編纂委員会 2016，p. 26）。また，1960 年代半ば頃に全国鞄卸商連盟が東京都に協力して行った全国調査では，教師からランドセルに対し，「合理的で簡便な，かつこれ以上の優れたものはない」と多くの回答があったという（ランドセル 130 年史編纂委員会 2016，p. 25）[9]。

実際，ランドセル通学廃止を実施した地域においても，保護者の思いは複雑であったようである。市ぐるみで大規模なランドセル通学廃止を行った兵庫県西宮市内の小学校では，ランドセルの代わりに，「連絡帳，筆箱，教科書の一部が入るていどの簡単な袋かカバン」を用意することとされた（大橋，1980，p. 9）。大橋（1980）は，ランドセル廃止から 13 年後の，西宮市児童の通学鞄について紹介している。それによると，西宮市内全 37 校における小学 1 年生の鞄の割合は，布背負鞄が 40.5%，手提げ鞄が 36.0%，ランドセルが 15.5%，肩掛鞄が 8.0%であり，市販の鞄や手作りの鞄など，十人十色であった。大橋（1980）では，西宮市児童の通学鞄に対する母親の意見も紹介されている。ランドセルと違い，軽くて負担が少ないという声や，忘れ物をしなくて済むといった声が上がる一方で，鞄の底が破れてしまったという声や，入学祝いにランドセルを買えないことに寂しさを感じているという声もあった。また，少数派ではあるが，両手が空けられるといった理由で，ランドセルを購入したという声もあった。

丸山（2016）は，新聞記事の分析を通じて，1970 年頃に「ランドセル廃止」運動が沈静化したと述べている。ランドセルへの再認識の気運も高まり，例えば千葉県館山市教育委員会では，1970 年，値段を統一したランドセルを認めるよう調整する方向となり，また同年船橋市や市川市においては，市民から手提げ袋通学のだらしなさが指摘され，500 人をテストケースに，児童にランドセルを持たせることとなったとされている（ランドセル 130 年史編纂委員会 2016，p. 26）。

「ランドセル廃止」運動は，最終的には沈静化に至ったものの，ランドセルの必要性について人々が考え直す契機となったと考えられよう。西宮市の状況からもわかるように，この運動は児童の通学鞄の多様化を招いたとも捉えられる。「男児は黒色，女児は赤色」のランドセル使用が当然視されていた時代の「ランドセル廃止」運動は，1970 年代半ば以降に徐々に進んでいくランドセル多様化の動きの予兆であったのかもしれない。

3.2　多色化するランドセル

このように，黒色と赤色が主流となっていたランドセルをめぐって廃止運動が展開する一方で，

9）　1960 年代末頃に行われた中小企業振興事業団によるランドセルに関する調査において，ランドセルの必要性に関して尋ねた回答では，「ぜひ必要」という回答は，人口 100 万人以上の都市では 38.0%であったのに対し，郡部では 56.0%と，ランドセルに対する意識には地域差がみられた。愛知鞄百年史編纂委員会編（1977），pp. 31–38 参照。

1970年代半ば以降，多色化の動きがみられた。『読売新聞』は，1976年1月の記事で，「昨年までは黒と赤が大半を占めていたが，ことしはこのほかにグリーンとか黄色，ピンク，紺色などが目立ってふえてきた」と報じている（読売新聞社 1976）。

ランドセルの多色化を可能にしたのは，第2節で言及したように，1964年のクラリーノの開発であった。人工皮革であるクラリーノは，素材が均一化されているため生産性が高く，多彩なカラー展開が可能であり，次第に需要が増えていった（ランドセル130年史編纂委員会 2016，p. 44）。

しかし，黒色・赤色以外の色の購入者は，当初は少なかったようである。遠藤（1993）によれば，多色ランドセルが市場に出回り始めてから10年以上経過した1993年においても，デパートや量販店におけるランドセルの売り上げは，黒色･赤色が，全体の95％以上を占めたという。ただし，高島屋や阪急百貨店など，一部の店舗においては，売り上げの2～3割程度が，黒色・赤色以外の色であった（遠藤 1993；毎日新聞社 1993）。しかし，全体的にみると，2000年以前はまだ例外的であったといえる。

黒色・赤色以外のランドセルの普及が進みにくかった要因として，次の2点が挙げられる。1点目に，ランドセルを，孫への贈答品として祖父母が選ぶことが多かったことである。遠藤（1993）で紹介されている三越の従業員の声によれば，ランドセル購入者の8割程度が祖父母であり，両親は2割程度だったという。祖父母が選ぶため，黒色・赤色という伝統色が購入されやすい。加えて贈答品であるため，定番で無難な色味として，黒色・赤色を選ぶことが多かった（中日新聞社 1990）。2点目に，黒色・赤色以外のランドセルの使用が，いじめやからかいを招く恐れがあると考えられたことである。他の児童とランドセルの色が異なることで，児童が不安を感じたり，からかわれて傷ついたりすることや，ランドセルの色の違いによるいじめを親が懸念するといったことがあった。実際に，母親が購入した紺色のランドセルを，最初は大喜びで使用していた女児が，級友に「男みたい」,「どうして紺色なの」とからかわれ,「やはり赤色がよかった」と言うようになったという事例がある（朝日新聞社 1984）。また，遠藤（1993，p. 34）では，娘の気に入ったピンク色を買おうとしたが，いじめを危惧して結局赤色を購入したという親の声も紹介されている。

素材・色・形などの点でランドセルの個性化が進む（朝日新聞社 1990）ことは，一方でランドセル業界にとっては新たな困難に直面することでもあった。なぜなら，ランドセルが多様化すると，メーカー各社は設備投資の増額や手間の増大により，生産対応が難しくなるためである（ランドセル130年史編纂委員会 2016，p. 28，p. 90）。1994年，ランドセル工業会は，ランドセルの大きさや形，色等に関する申し合わせ事項を定め，大型ランドセルや横型ランドセル，黒色・赤色以外の多色ランドセルといった変形ランドセルの生産・販売を，できる限り自粛することとした（ランドセル130年史編纂委員会 2016，p. 133）。しかし，その翌年の1995年以降も，色や形が個性的なランドセルが売り場に並んだという報道が見られる（毎日新聞社 1995；毎日新聞社 1996）。したがって，この申し合わせ事項によってランドセル業界が足並みを揃えることはなく，ランドセル個性化の流れに歯止めがかかることはなかったようである。

購入に至ることは少なかったとはいえ，カラフルなランドセルに対する消費者の評価自体は悪くなかったと思われる。遠藤（1993）によると，児童自身や，ファッション感覚のある若い母親などを中心に，多色ランドセルに興味を抱く者が多かったようである。1990年代初め頃には，おしゃれな子ども服が増えていたことを背景に，ランドセルの色にも変化が盛り込まれた（中日新聞社 1991）。子どものファッションに対する親の関心の高まりとともに，カラフルなランドセルの人気は着実に高まっていった。

3.3　個性重視のランドセル選びとジェンダー規範

実際にカラフルなランドセルが普及するようになったのは，2000 年に入ってからのことであった。2001（平成 13）年にイオンリテールが 24 色ランドセルの販売を開始するなど（ランドセル 130 年史編纂委員会 2016，p. 90・p. 134），ランドセルの多色化が本格化した。大手企業が多色ランドセルを販売したことで，他メーカーにおいても多色ランドセルの製造が進んだと思われる。

こうして，多様な色のランドセルの販売が広がる中，黒色や赤色といった定番色が選ばれる機会は急速に減少していった。愛知県の松坂屋本店では，2002 年は黒色・赤色がランドセル販売個数の 7 割を占めていたが，2003 年には 5 割に低下した（毎日新聞社 2003）。クラレの調査によれば，黒色のランドセルを購入した男児の割合は，2008 年に 63.5%，2009 年に 55.0%と減少し，代わって青系・紺系を合計した割合が，2008 年の 20.5%から，2009 年に 30.5%へと増加した。また，赤色のランドセルを購入した女児の割合は, 2008 年の 42.5%から, 2009 年の 27.5%へと大きく減少し，ピンク系が 2008 年の 37.5%から 2009 年に 53.5%と増加した（宣伝会議 2009，p. 115）。

2018 年から 2021 年に購入されたランドセルの色の上位 5 位を示したのが，表 3 である。これを見ると，黒色･赤色の人気が根強く残る一方で，さまざまな色のランドセルが購入されるようになったことがわかる。

とはいえ，男児では，依然約 6〜7 割が黒色のランドセルを選択している。2021 年には黒色の割合は 61.2%と，前年より 8.8%減少しており，今後黒色以外の色味の人気が高まることも考えられよう。黒色以外では，紺色や青色などの落ち着いていて似通った色が選ばれており，4 年連続で上位 5 色の順位は変わっていない。一方，女児においては，赤色・桃色・うす紫色といった人気の色が，各色 2 割程度の割合で，ほぼ均等に選ばれている。男児と比較すると，明るい色が多く，色味も分散している。多色化が進んだとはいっても，人気の色は比較的固定化しており，男児は青系の色，女児は赤系の色を選択する傾向は明らかである。

カラーランドセルの人気が上昇し，現在のように売り上げを支える商品となったことには，ラン

表 3　2018–2021 年における購入されたランドセルの色

		2018	2019	2020	2021
男児	第 1 位	黒（67.0%）	黒（68.1%）	黒（70.0%）	黒（61.2%）
	第 2 位	紺（15.2%）	紺（13.1%）	紺（12.6%）	紺（16.9%）
	第 3 位	青　（7.8%）	青　（9.3%）	青　（8.6%）	青（10.6%）
	第 4 位	緑　（2.9%）	緑　（3.8%）	緑　（3.3%）	緑　（3.7%）
	第 5 位	こげ茶　（1.9%）	こげ茶　（1.6%）	こげ茶　（2.3%）	こげ茶　（1.6%）
女児	第 1 位	桃（24.7%）	赤（25.5%）	赤（23.4%）	うす紫（21.5%）
	第 2 位	赤（20.6%）	桃（21.3%）	うす紫（22.0%）	赤（21.1%）
	第 3 位	うす紫（18.0%）	うす紫（18.8%）	桃（21.5%）	桃（19.3%）
	第 4 位	こげ茶（15.3%）	水色（11.4%）	水色（10.9%）	水色（11.4%）
	第 5 位	水色（10.7%）	こげ茶（10.4%）	こげ茶　（8.5%）	うす茶　（9.0%）

（ランドセル工業会（2021）より筆者作成）

ドセルの購入者側の変化も大きく関わっていると考えられる。1990 年頃までは，祖父母が孫に向けてランドセルを選び購入する機会が多かったが（中日新聞社 1990 年 1 月 12 日，朝刊；ランドセル工業会 2021），その後は児童自身がランドセル購入の決定権を持つことが増えてきた。クラレの調査によれば，児童自身がランドセルを選んだ割合は，2007 年に男児 45%，女児 63%であったが，2015 年には，男児 66%，女児 78%と増加している（ランドセル 130 年史編纂委員会 2016，p. 91）。また，2018 年から 2021 年の別の調査によると，ランドセル購入決定者が児童自身である割合は，男女合計で，2018 年では 74.5%，2019 年では 76.3%，2020 年では 76.0%，2021 年では 77.2%となっている。2018 年から 2021 年までの調査結果では，児童の次に両親がランドセル決定者となっており，毎年 20%程度を占めていた（ランドセル工業会 2021）。祖父母の割合は不明であるものの，非常に低くなっていると考えられる。

一方で，クロス・マーケティングの 2018 年から 2021 年の調査（ランドセル工業会 2021）によると，ランドセル購入代金の支払者は，4 年とも，50～60%が祖父母であり，40%前後が両親であった。したがって，祖父母または親のいずれか，あるいは両者が費用を折半して購入することが多いと考えられる。ランドセル購入の決定者が祖父母から児童自身に変化した一方で，購入代金の支払者は祖父母が中心という傾向は変わっていないものと考えられる。

ランドセル購入の決定者の変化には，日本における少子化の影響が考えられる。文部科学省「令和 3 年度学校基本調査」（2021）によれば，小学校の在学者数は，1981 年の第 2 次ベビーブームの 11,925,000 人をピークに年々減少し，2021 年には 6,223,000 人と，1981 年のおよそ半数となっている。少子化が進むことで，児童 1 人に対して，両親，母方の祖父母，父方の祖父母と，少なくとも 6 人の大人が関わることになり，児童に対し高い金額をかける一方で児童の意思を尊重することが増えたのではないかと考えられる。

実際，ランドセルは，近年高額化が進んでいる。ランドセルの平均価格は，誕生当初から高額化し続けた後，1990 年から 2004 年までは 35,000 円で推移した。2005 年は 31,500 円，2006 年は 29,900 円と多少安価となったが，その後再び高額化に転じ，2021 年には 55,339 円となっている（ランドセル 130 年史編纂委員会 2016, pp. 48–50；ランドセル工業会 2021）。また，2003 年 2 月 2 日付『朝日新聞』（朝日新聞社 2003）には，「少子化で個性を重視のランドセル」という見出しの記事があり，2006 年 1 月 28 日（朝日新聞社 2006）には，「ランドセル，進む高級化／少子化，たっぷり愛情」という見出しの記事が掲載されている。これらの記事からは，「自分だけのランドセルを持ちたい」という児童の思いや，「個性的なランドセルを選びたい」，「ブランド品や高級品を早めに手に入れたい」という親の思いが，ランドセル購入に反映されていることが読み取れる。このように，少子化によって，親などが児童の意思を尊重し，児童に費用をかけるようになるにつれて，個性的なランドセルが選ばれるようになったと思われる。

ところで，ランドセルの個性化が顕著なのは，男児以上に女児においてである。これを，ジェンダーをめぐる動きと照らし合わせて考えてみたい。

1970 年代以降，性別役割分業や固定的なジェンダー観に対して，批判意識が高まっていった（江原・山田 1999，p. 22）。ウーマンリブ運動の活発化や女性差別撤廃という世界的な潮流を受けて，1980 年代になると日本でも男女平等を目指す政策が展開されていった。さらに，1996 年には，内閣総理大臣の諮問会議である男女共同参画審議会によって「男女共同参画ビジョン」が答申され，男女平等をも超えて，ジェンダーフリーの志向も打ち出された（大沢 2000，p. 13）。

特に 2000 年代に入ると，女性労働のあり方は大きく変化してきた。蓑輪（2016）によれば，

2000年以降，女性のM字型雇用の底となる数値が年々上昇しており，既婚女性の労働力率もより高い水準で推移するようになった。低年齢児を持つ母親の就業傾向も，2000年以降，急速に高まったという。1990年代以降の長期にわたる日本経済の低迷もあいまって，女性の就労継続と共働きの主流化が進行してきている。特に近年では，少子化や労働力人口減を背景に，育児休業制度が強化されるなど，職場における男女平等の促進に向けた動きが進んでいる[10)]。さらに，2021年の衆議院選挙では，ジェンダーの多様性に関する施策として，選択的夫婦別姓制度や，LGBTの差別禁止，同性婚容認などを多くの政党が公約に盛り込むなど（NHK選挙WEB 2021），ジェンダーの平等・多様化を目指す動きもみられるようになっている。

とはいえ，ジェンダー平等や多様化は，実現したとはいいきれない状況にある。例えば，各国の男女格差の指標として世界経済フォーラムが毎年発表している「ジェンダーギャップ指数」をみると，日本は2021年に0.656であり，156カ国中120位であり，先進国の中では最低レベル，アジア圏の国の中でも低位であった。1が完全平等，0が完全不平等を意味するジェンダーギャップ指数の日本の数値は，2006年以降ほとんど変化していない（内閣府男女共同参画局2021）。

翻ってランドセルの多色化とジェンダー観との関わりを考えると，近年は，「男児だから黒色のランドセル」，「女児だから赤色のランドセル」ではなく，「その児童が選んだからこの色のランドセル」というように，多様な色味の中から児童の意思を尊重した「その子らしい」ランドセルが選択されるようになった。特に女児では，赤色のランドセルはもはや多数派ではなく，多数派そのものがなくなってきている。しかし，男児では依然として黒色が多数派を占めており，また男児では黒色を中心とした寒色系の色，女児では暖色系やパステル系の明るい色が固定的な人気色となっている。多色化が進んだとはいっても，男児と女児とではその程度は異なっており，児童の性別ごとに選択される色味のパターンが依然として存在するという意味では，ランドセルの「個性化」は限定的であるといえよう。それはちょうど，1970年代以降，女性のライフコースが多様化してきたとはいえ，性別役割分業が解消されたわけではないことや，男性のライフコースは大きく変化していないことの反映のように思われるのである。

おわりに

本稿では，ランドセルの色を中心とした歴史を整理しながら，日本におけるジェンダー観との関連について検討してきた。第1節では，ランドセルの誕生と普及について概説した。ランドセルの起源が背嚢であり，伊藤博文が嘉仁親王に献上したことが学用品としての誕生の契機となったこと，ランドセルの色は黒色から始まったことなどについて言及した。ランドセルは大都市部の中間層へ次第に普及し，アジア太平洋戦争中の統制経済のもとで多様な素材・色や模様の代用品が製造され，購入層も拡大した可能性を示唆した。第2節では，児童雑誌『小学一年生』の挿絵や表紙絵に描かれたランドセルの色を分析しながら，高度成長期におけるジェンダー規範という観点から考察した。その結果，赤色のランドセルは1950年頃までには誕生し，1960年代半ば頃から男児は黒色，女児は赤色のランドセルが標準化していったことも明らかとなった。その背景には，人工皮革の開発と

10）厚生労働省「令和2年度雇用均等基本調査」によれば，2020年の男性の育児休業取得率は12.65％で，低水準ながらこの数年で飛躍的に増加している。

いう技術革新や，社会における性別役割分業のもとでの色彩による性別表示の広がりがあった。第3節では，1960年代後半以降のランドセル相対化の動きとジェンダー規範の揺らぎの関連性について検討した。1960年代後半から1970年代にかけて起こったランドセル通学廃止の動きは，ランドセルという児童の通学鞄が受験競争の激化を象徴するものとみなされていたゆえのものであったが，消費者側ではランドセルの必要性や通学鞄の多様化へ，またランドセル業界では製造方法や販売戦略の見直しへとつながるものでもあった。その頃から徐々にランドセルの多色化が進み，2000年代に入ると児童自身の意思を重視した色味の選択が普通となっていった。ただし，男児が黒色を中心とした寒色系，女児が赤系色を選択するという傾向は維持されており，ランドセルの「個性化」は限定的であると指摘した。

以下では，ランドセルの色とジェンダー観の関連について考察する。本稿では，仮説として，1950年代半ばから1960年代にかけての高度経済成長期において，性別によるランドセルの色の選択が一般化したこと（仮説a），近年ジェンダーステレオタイプの解消が目指される中で，ランドセルの色も多様化してきたこと（仮説b）の2点を挙げて検討した。

仮説aについて，「男児が黒色，女児が赤色」という性別に対応したランドセル使用に関する規範が成立したと思われる1960年代半ば頃は，都市部を中心に性別役割分業が明確化し，男女のライフコースの分化が進行した時期である。そうした中でこそ，性別に対応したランドセルの色にみられるような視覚的な男女の区別が，広く社会に受け入れられていったのであろう。人工皮革クラリーノの開発による赤色ランドセルの安価な供給も，それを後押しすることにつながったのではないだろうか。以降，ランドセルの多色化の動きが始まる1970年代半ば頃まで，ランドセルの主流が黒色と赤色で維持されたことは，この時期まで男女を区別することが当然視されてきたということを意味しているように思われる。

仮説bについて，ジェンダーステレオタイプ解消の動きとランドセルの多色化との間には，一定の関連性があると考察される一方で，多色化の範囲はあくまでも男児は黒系色・女児は赤系色を基盤に，限定的な形に留まったものと捉えることができる。男女平等やジェンダーフリーの実現が未だ達成されない中では，ランドセルの色も引き続き固定される傾向にあるのだろう。

以上をふまえると，本稿で提示した2つの仮説，すなわちランドセルの色の歴史と日本人のジェンダー観の関連性について，一定程度示すことができたと思われる。仮説aについては，男女の区別に対する社会意識が，性別に対応した黒色と赤色のランドセルを受け入れる素地となっていたと考えられる。仮説bにおいては，ランドセルの多色化とジェンダー観の揺らぎのいずれも，現在のところは限定的と考えられる。

本研究の残された課題として，次の2点が挙げられる。1点目に，全ての『小学一年生』の巻号を参照できていないことである。研究対象が一部の『小学一年生』に限られたことで，赤色のランドセルの誕生時期などについて，正確な特定ができていない可能性が考えられる。このため，今後，『小学一年生』にさらに着目したり，他の児童雑誌を分析したりすることで，結果の信頼性を高めていく必要があるだろう。2点目に，企業が黒色・赤色のランドセルを製造した理由や，ランドセルの色の変化とジェンダー観との関連性について，史料的検証が十分にはなされていない点である。これについては，ランドセル業界への調査を含め，より実態に迫った検討が必要となるだろう。

付記

本稿は，山田彩佳「ランドセルの歴史と日本人のジェンダー観の関連に関する研究―ランドセルの色の変遷に着目して―」（2021年度南山大学人文学部心理人間学科研究プロジェクト論文）をもとに執筆されたものである。

引用文献

安孫子義弘（1966）「皮革資源」『化学工学』30（11），pp. 984–988。

愛知鞄百年史編纂委員会編（1977）『愛知鞄百年史』名古屋鞄協会。

愛知鞄九十年史編纂委員会編（1968）『愛知鞄九十年史』名古屋鞄協会。

朝日新聞社（1951）「少年雑誌あふれる　戦後最大の部数　780万に」『朝日新聞』1951年12月6日夕刊。

朝日新聞社（1962）「売行き伸びる“安全色”カバン屋さん　いそがしいランドセル生産」『朝日新聞』1962年1月31日朝刊。

朝日新聞社（1984）「娘と紺色のランドセル」（ひととき）『朝日新聞』1984年6月13日朝刊。

朝日新聞社（1990）「ランドセル　素材・色・形…　個性化進む」『朝日新聞』1990年2月17日夕刊。

朝日新聞社（2003）「少子化で個性を重視のランドセル」（トレンドあいち）『朝日新聞』2003年2月2日朝刊。

朝日新聞社（2006）「ランドセル，進む高級化　4万円台人気，7万5千円売り切れ　少子化　たっぷり愛情」『朝日新聞』2006年1月28日朝刊。

中日新聞社（1990）「出た　12色ものランドセル　デパートの学用品売り場　黄や緑…お客も『エッ』」『中日新聞』1990年1月12日朝刊。

中日新聞社（1991）「おしゃれ感覚　背負って!!　ランドセル鮮やかに15色　塾通いも便利　2ウェー型も　栄の百貨店」『中日新聞』1991年1月10日朝刊。

江原由美子・山田昌弘（1999）『ジェンダーの社会学：女と男の視点からみる現代日本社会』放送大学教育振興会。

遠藤正武（1993）「ランドセルは『桃色革命』前夜　赤と黒　色の呪縛からの解放」『朝日新聞ウィークリーAERA』朝日新聞出版社，1993年4月20日号，pp. 34–37。

博学こだわり倶楽部編（2017）『暮らしの中の表示』河出書房新社。

日髙杏子（2021）『色を分ける　色で分ける』京都大学学術出版会。

細谷俊夫ほか編（1990）『新教育学大事典』第6巻，第一法規出版。

北神慎司・菅さやか・Kim Heejung・米田英嗣・宮本百合（2009）「トイレのマークは色が重要？　トイレマークの認知におけるストループ様効果」『日本認知心理学会第7回大会発表論文集』p. 19。

金野美奈子（2000）『OLの創造：意味世界としてのジェンダー』勁草書房。

毎日新聞社（1993）「カラフルなランドセルが人気　親子連れが迷っちゃう」『毎日新聞大阪版』1993年2月9日朝刊。

毎日新聞社（1995）「個性化ランドセル　子の意見を尊重…」『毎日新聞』1995年3月8日朝刊。

毎日新聞社（1996）「ランドセルも個性化時代だが…根強い『黒・赤』の定番志向　より軽く　より丈夫に」『毎日新聞』1996年1月19日朝刊。

毎日新聞社（2003）「高級品，多色…ランドセルも個性くっきり」『毎日新聞』2003年1月25日夕刊。

丸山啓史（2016）「1960年代におけるランドセル通学廃止の経過：宿題にみられる学校教育の家庭依存に関わって」『子ども社会研究』22，pp. 155–171。

蓑輪明子（2016）「2000年代における女性労働とケアの現状：低年齢児童を持つ家族の労働と保育」『大原社会問題研究所雑誌』695・696（合併号），pp. 19–34。

大橋鎮子（1980）「ランドセルをやめて13年の西宮市　軽いもの　安いもの　丈夫なもの　ランドセルにこだわらな

い町」『暮しの手帖』1980 年 2 月号，pp. 5–15。
大沢真理編（2000）『21 世紀の女性政策と男女共同参画社会基本法』ぎょうせい。
刑部芳則（2021）『セーラー服の誕生：女子校制服の近代史』法政大学出版局。
佐藤秀夫（1987）『学校ことはじめ事典』小学館。
佐藤朋彦（2020）『家計簿と統計』慶應義塾大学出版会。
宣伝会議（2009）「広告ビジネスに役立つ MARKETING DATA　2009 年ランドセル購入者アンケート」『宣伝会議』2009 年 3 月 1 日号，通巻 760 号，p. 115。
総理府統計局編（1964）『家計調査総合報告書　昭和 21–37 年』。
総理府統計局編（1977）『昭和 38 年～50 年の家計―家計調査―』日本統計協会。
ランドセル 130 年史編纂委員会編（2016）『ランドセル 130 年史』日本鞄協会ランドセル工業会。
読売新聞社（1976）「ランドセル　型はシンプル　色は多様化“高級”よりも実質本位」『読売新聞』1976 年 1 月 27 日朝刊。

引用ウェブサイト

学習院初等科（2022） https://www.gakushuin.ac.jp/prim/　最終閲覧日：2022 年 2 月 19 日。
羽倉（2020）「知ってる？ランドセルの歴史と名前の由来　HAKURA 大人もうらやむ羽倉の 27 色」2020 年 10 月 29 日 https://www.hakura-randsel.jp/column/419　最終閲覧日：2021 年 11 月 19 日。
一般社団法人日本雑誌協会（2021）「印刷部数公表」 https://www.j-magazine.or.jp/user/printed/index　最終閲覧日：2021 年 10 月 20 日。
小島克己・後藤孝夫・加藤一誠（2012）「日本における交通安全政策と規制の変遷（1950 年～2010 年）」『7 ヶ国における交通安全政策と規制の変遷（1950 年～2010 年）』国益財団法人国際交通安全学会　https://www.iatss.or.jp/common/pdf/iatss/composition/7CountriesReport_jp_07Japan.pdf　最終閲覧日：2022 年 2 月 19 日。
厚生労働省（2021）「令和 2 年度雇用均等基本調査」 https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/71-r02.html　最終閲覧日：2022 年 2 月 19 日。
文部科学省（2021）「令和 3 年度学校基本調査」 https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/kekka/k_detail/1419591_00005.htm　最終閲覧日：2022 年 2 月 19 日。
内閣府男女共同参画局（2021）「世界経済フォーラムが『ジェンダー・ギャップ指数 2021』を公表」 https://www.gender.go.jp/public/kyodosankaku/2021/202105/202105_05.html　最終閲覧日：2022 年 2 月 19 日。
NHK 選挙 WEB（2021）「衆議院選挙 2021」 https://www.nhk.or.jp/senkyo/database/shugiin/2021/pledge/policy/08/　最終閲覧日：2021 年 11 月 26 日。
日本タンナーズ協会（2020）「革きゅん ABOUT LEATHER」 https://kawa-kyun.jp/aboutleather/#a01　最終閲覧日：2021 年 8 月 29 日。
小学館（2015）「『小学一年生』90 年のあゆみ　表紙コレクション」 http://www.shogakukan.co.jp/pr/sho1_90th/　最終閲覧日：2021 年 10 月 21 日。
トンボ（2020）「日本の学ぶスタイルの変遷（明治・大正）」 https://www.tombow.gr.jp/uniform_museum/style/style03.html　最終閲覧日：2021 年 8 月 29 日。
土屋鞄製造所（2013）「ヌメ革について」 https://tsuchiya-kaban.jp/blogs/library/20130513　5 月 13 日，最終閲覧日：2021 年 8 月 29 日。
ランドセル工業会（2021）「ランドセルくらぶ」 http://www.randoseru.gr.jp　最終閲覧日：2022 年 2 月 19 日。

引用史料

小学館（1936）『小学一年生』1936 年 9 月号（第 12 巻 8 号）。

小学館（1949）『小学一年生』1949 年 4 月号（第 5 巻 1 号）。
小学館（1949）『小学一年生』1949 年 7 月号（第 5 巻 4 号）。
小学館（1949）『小学一年生』1949 年 8 月号（第 5 巻 5 号）。
小学館（1949）『小学一年生』1949 年 9 月号（第 5 巻 6 号）。
小学館（1949）『小学一年生』1949 年 10 月号（第 5 巻 7 号）。
小学館（1950）『小学一年生』1950 年 3 月号（第 5 巻 12 号）。
小学館（1950）『小学一年生』1950 年 4 月号（第 6 巻 1 号）。
小学館（1950）『小学一年生』1950 年 6 月号（第 6 巻 3 号）。
小学館（1950）『小学一年生』1950 年 7 月号（第 6 巻 4 号）。
小学館（1951）『小学一年生』1951 年 4 月号（第 7 巻 1 号）。
小学館（1951）『小学一年生』1951 年 10 月号（第 7 巻 7 号）。
小学館（1951）『小学一年生』1951 年 11 月号（第 7 巻 8 号）。
小学館（1952）『小学一年生』1952 年 4 月号（第 8 巻 1 号）。
小学館（1953）『小学一年生』1953 年 4 月号（第 9 巻 1 号）。
小学館（1954）『小学一年生』1954 年 4 月号（第 10 巻 1 号）。
小学館（1956）『小学一年生』1956 年 4 月号（第 12 巻 1 号）。
小学館（1957）『小学一年生』1957 年 4 月号（第 13 巻 1 号）。
小学館（1958）『小学一年生』1958 年 4 月号（第 14 巻 1 号）。
小学館（1959）『小学一年生』1959 年 4 月号（第 15 巻 1 号）。
小学館（1960）『小学一年生』1960 年 4 月号（第 16 巻 1 号）。
小学館（1961）『小学一年生』1961 年 4 月号（第 17 巻 1 号）。
小学館（1962）『小学一年生』1962 年 4 月号（第 18 巻 1 号）。
小学館（1963）『小学一年生』1963 年 4 月号（第 19 巻 1 号）。
小学館（1964）『小学一年生』1964 年 4 月号（第 20 巻 1 号）。
小学館（1965）『小学一年生』1965 年 4 月号（第 21 巻 1 号）。
小学館（1966）『小学一年生』1966 年 4 月号（第 22 巻 1 号）。
小学館（1967）『小学一年生』1967 年 4 月号（第 23 巻 1 号）。
小学館（1968）『小学一年生』1968 年 4 月号（第 24 巻 1 号）。
小学館（1969）『小学一年生』1969 年 4 月号（第 25 巻 1 号）。